

# 日本的親の養育態度が子どもの自尊感情に及ぼす影響 —内的作業モデルを媒介変数に仮定したモデルの検証—

The effect of Japanese parental attitudes on children's self-esteem  
— Verification of the model assuming an internal working model as a mediator —

吉田 美波  
跡見学園女子大学大学院  
人文科学研究科臨床心理学専攻  
Minami Yoshida  
Division of Clinical Psychology,  
Graduate School of Humanities,  
Atomi University

野島 一彦  
跡見学園女子大学  
Kazuhiko Nojima  
Atomi University

## 要 約

本研究の目的は、個人の内的作業モデルを媒介変数として仮定し、親の養育態度が青年期における個人の自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討することである。方法として、女子大学生363名(平均年齢19.93±1.21歳)を対象に、①日本の養育態度、②内的作業モデル測定のための「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」(中尾ら, 2004)、③自尊感情尺度(山本ら, 1982)から構成される質問紙調査を行った。その結果、①親の養育態度としての〈他者比較〉は、子どもの「見捨てられ不安」及び「親密性の回避」を高め、自尊感情を低下させることが明らかとなった。②また、親の養育態度としての〈謙遜〉は、「見捨てられ不安」のみを高め、自尊感情を低下させることが示された。③なお、親の養育態度としての〈曖昧表現〉による自尊感情の向上及び低下への影響は証明されなかった。

【Key Words】親の養育態度, 子ども, 内的作業モデル, 自尊感情

## I 問題と目的

私たちのパーソナリティや自尊感情といった、自己を形づくる様々な要因は実に個別的である。このような個人差ともいうべき自己はどのように形成されるのであろうか。もちろん、個人の生得的要因も大きいであろうが、人間は学習による可塑性を有する生物である以上、環境などの外的要因の影響が極めて大きいと考えられる。そ

の中でも、幼少期に経験する養育態度は、その後のパーソナリティの骨子となりうる非常に重要な要因と考えられる。

### 1. 文化的自己感と養育態度及び自尊感情

文化的自己感とは、文化と心のプロセスの関係における、「ある文化において歴史的に共有されている自己についての素朴理論」を指す。Markus & Kitayama(1991)は、文化の中で共有される自己観があると

し、アメリカ文化においてみられる相互独立的自己観と、日本文化においてみられる相互協調的自己観の二種類があると述べている。前者は、自己と他者を切り離れた独立した存在として捉える自己観であり、個人は独自の感情や考えを持ち、それに基づき行動する。後者は、自己と他者は切り離すことの出来ない結びついた存在として捉える自己観であり、自己と他者の関係性の中で、その時々に変化する他者の行動や感情によって、自分というものが規定される。これらの文化的自己観の違いから、欧米では自己の能力を高く見ようとする自己高揚バイアスが見られるが、日本ではそれが見られず、反対に自己の能力を低く見ようとする自己批判傾向が強く見られる(遠藤, 1995)といった差異も現れるという。相互独立的自己観を持つアメリカ文化において、個人の行動が自己の責任へと帰属されるために、自己の能力が高いこと、また、そのように他者に思われることが重要なのである。しかし、相互協調的自己観を持つ日本文化においては、他者との関係性の崩壊が致命的となるために、他者配慮が重要となる。そのために、自慢や誇示は他者に対して攻撃性を帯びるため避け、自分や身内などの「うち」のことについて「そと」に話すとき、よいことは控えめに、否定的な方に傾かせながら話す傾向(東, 1994)が見られる。アメリカ文化では、自分の能力が高いことを主張することによって、そして、日本文化では、自己卑下呈示や自己謙遜表出、そして曖昧表現によって適応的に良好な人間関係を築いているのである。

## 2. 親の養育態度と子どもの自尊感情

幼少期における親の養育態度と子どもの自尊感情に関連が見られることは多くの研究で報告されている。例えば、児童期に褒められることが多いほど自尊感情が高くなる(井上, 2015)、親の否定的な言葉は、子どもの自尊心の発達を妨げ、低くすることにつながる(野村・福井, 2008)等の報告がある。自尊感情とは、自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚(心理学辞典, 1999)であり、人間が心理的に十分に機能するための基盤となるものである。高い自尊感情が様々な望ましいとされる特徴と結びついているという結果が様々な先行研究で報告されており、武藤ら(2004)によると、自尊感情が高い場合には、ストレスが低く情緒的に安定し、困難に直面してもあきらめず積極的に対処しようとし、達成へ強い動機付けをもち、人に対する緊張が低く周囲の人々から好意的に評価されるという。しかしながら、自己卑下呈示や自己謙遜表出を多く用いる日本人の子どもは、親が自身のことを他者に対して否定的に表現するというような経験をすると考えられる。この親の「そと」に対して子どものことを控えめに、否定的に話すという自己謙遜表出や自己卑下提示が、子どもの自尊感情の低下につながると推測される。

## 3. 内的作業モデルと養育態度及び自尊感情

内的作業モデル (Internal Working Model) とは、Bowlby(1969, 1973, 1980)により提唱された概念であり、坂上(2005)によれば「子どもがアタッチメント対象との

相互作用を通して、周囲の世界がどのようなものであるのか、母親や他の重要な人物がどのようにふるまうのか、自分自身がどうふるまうのか、といった、自己と他者および周囲の世界に関して構築する表象モデル」とされる。人は乳幼児期、児童期および思春期という発達過程において重要な他者との繰り返しの相互作用の中から、自分や他者あるいはそれらを取り巻く環境についての一般的・抽象的な規則を抽出し、内的作業モデルとしての心的表象を徐々に形成する。その心的表象に基づき、子どもが社会的な関係や自己理解、自己認知、社会的認知を形成し、個人の認知・感情・行動を導く心的ルールとして作用するため、個人の適応に影響を与えるものと考えられている。

内的作業モデルは、自分が他者から世話され保護され得るかどうかどうかという自己に関するモデルと、他者が自分の要求に応じてくれるかどうかという他者に関するモデルの2つからなり、前者のモデルを「自己感」、後者のモデルを「他者感」という(泉・石田, 2012)。そして、各個人が持つ内的作業モデルの様式に対応した行動スタイルが、対人場面で現れることがこれまでの研究から分かっており、このような行動スタイルは「愛着スタイル」と呼ばれる(泉・石田, 2012)。

Hazan & Shaver(1987)が成人の恋愛を愛着プロセスであると概念化してから、成人愛着研究において、恋人との愛着スタイルを測定する尺度が数多く開発されている(Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。内的作業モデルの測定にはこのBrennan, Clark, & Shaver(1998)が作成したECR(the Experi-

ences in Close Relationships)が規準的尺度として多くの研究で使用されている(島, 2010)。ECRは、“自己についてのモデル”に対応した“不安”(見捨てられ不安：他者から見捨てられるかもしれないという不安を反映したもの)と“他者についてのモデル”に対応した“回避”(親密性の回避：親密な関わりを避ける傾向を反映したもの)の2次元を測定するように構成されている(島, 2010)。このECR日本版尺度「成人愛着スタイル尺度」を中尾・加藤(2004)が作成している。そして、中尾・加藤(2004)は、初対面の段階から対人関係を形成する場合の他者との相互作用パターンを想定するためには、従来の恋人を対象とした愛着スタイル尺度では困難であるとして、一般化された他者を想定させ回答させる愛着スタイル尺度である「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」作成している。そこで、本研究において大学生の内的作業モデルの測定には、この中尾・加藤(2004)が作成した「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」を用いる。

養育経験、あるいは子どもの親の養育態度についての認知が、内的作業モデルを媒介し、子どもの適応に影響すると言われている。島(2014)によると、親の養育態度を肯定的に認知しているほど、内的作業モデルの“不安”と“回避”が低く、そして、“不安”と“回避”が低いことが、社会的適応を良好なものにするという。

#### 4. 本研究の目的

これまで述べてきた内容を整理すると、次のようなプロセスを仮定することができる。日本的親の養育態度が、子どもの内的

作業モデル形成に影響し、それが自尊感情の向上及び低下に結びつく、というものである。

本研究の目的は、このプロセスを検証するために、個人の内的作業モデルを媒介変数として仮定し、親の養育態度が青年期における個人の自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討することである。

## II 方法

### 1. 調査対象者

本研究の調査協力者は、関東圏内の4年制女子大学に属する大学生を対象として質問紙調査を実施した。このうち回答に不備があったものを除き、最終的に363名(平均年齢 $19.93 \pm 1.21$ 歳)のデータを分析対象とした。

### 2. 手続き

調査は、当該大学の講義時間内において、無記名式にて実施した。調査時期は2019年6月であった。実施に先立ち、対象者に考え込まずありのままに回答すること、無記名式のため個人が特定されることはないこと、について口頭にて教示した。

### 3. 質問項目

#### 1) 基本属性

対象者の基本属性として、学年、年齢、所属学部、及び所属学科について尋ねる。

#### 2) 日本的親の養育態度の認知に関する項目

1) 対象者の自身の親の養育態度認知について把握するため、まず養育者における子育ての姿勢や態度についての自由記述を求める。

#### 【自由記述項目】

両親もしくは養育者における子育ての姿勢や態度は、どのようなものだったか。

2) 次に3つの項目についての10段階評定を求める。現在まで日本の文化的自己観や規範を背景とした養育態度について把握するための標準化された尺度は存在しないため、船越・潮村(2013)に基づき、その主要な構成要素である「他者比較」、「謙遜」、および「曖昧表現」の3項目を設定した。具体的な項目は以下のとおりである。

#### 【10段階評定項目】

- ①他の子供と比較して、自分を褒めたり叱ったりすることが多かった。
- ②他者の前で、自分のことを謙遜する(他の子供を立てて、自分を下げるような表現をする)ことが多かった。
- ③何がいけなかったのか明確にしないまま、叱ることが多かった。

3) 内的作業モデル測定のための「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」個人の内的作業モデルについては、顕在的指標を用いて測定することが困難であり、他の多くの研究において、その顕在的行動の一つである「愛着スタイル」を測定している。そこで本研究でもこの方法に従事、中尾・加藤(2004)が作成した、他者に対する愛着スタイルを測定する「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」を用いた。下位因子では、「見捨てられ不安」18項目、及び「親密性の回避」12項目であり、計30項目から構成される。対象者はそれぞれの項目について、それがどの程度あてはまるかを「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの7段階で回答した。

4) 自尊感情 山本ら(1982)が作成した日

本版自尊心尺度を用いた。本尺度は、Rosenberg(1965)が作成した自尊心尺度における10項目(1因子)を測定するものであり、対象者はそれぞれの項目について「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階で回答した。

5) 分析方法 収集した各変数の相関関係については、Pearsonの積率相関係数を算出することで検討した。また、内的作業モデルの媒介変数としての機能を明らかにするために、まず親の養育態度の認知に関する3項目の各得点を独立変数、自尊心得点を従属変数とする単回帰分析を実施した。次に、親の養育態度の認知に関する3項目の各得点を独立変数、愛着スタイル得点を従属変数とする単回帰分析を実施した。最後に、親の養育態度の認知に関する3項目の各得点および愛着スタイル得点を独立変数、自尊心得点を従属変数とする階層的重回帰分析を実施した。投入順序は、Step 1において親の養育態度の認知に関する3項目の各得点、Step 2において愛着スタイル得点を投入した。解析にはIBM SPSS 25.0を使用し、有意水準は5%未満に設定した。

### Ⅲ 結果

収集したデータについて、まず各変数におけるピアソンの相関係数を算出した。次に、親の養育態度が子どもの内的作業モデル形成に影響し、さらに自尊心の向上あるいは低下に結びつく、という一連のプロセスを検討するため、内的作業モデルを媒介変数に仮定した分析を行った。

#### 1. ピアソンの相関係数における結果

表1に各変数における相関係数を示した。分析の結果は以下のとおりである。「他者比較」は、愛着スタイルにおける「不安」( $r=.17, p<.01$ )および「回避」( $r=.16, p<.01$ )と正の相関を示し、「自尊心」( $r=-.18, p<.01$ )と負の相関を示した。次に「謙遜」は、愛着スタイルにおける「不安」( $r=.17, p<.01$ )と正の相関を示し、「自尊心」( $r=-.10, p<.05$ )とは負の相関を示した。なお、「回避」とは有意な相関関係は認められなかった。最後に、「曖昧表現」は愛着スタイルにおける「不安」( $r=.19, p<.01$ )および「回避」( $r=.15, p<.01$ )と正の相関を示したが、「自尊心」については有意な相関関係は認められなかった。こ

表1 各変数における相関関係

	1	2	3	4	5
1. 比較					
2. 謙遜	.38**				
3. 曖昧表現	.30**	.36**			
4. 不安	.17**	.17**	.19**		
5. 回避	.17**	.10	.15**	.18**	
6. 自尊感情	-.18**	-.10*	-.09	-.57**	-.18**

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)

\* 相関係数は5%水準で有意(両側)

れらすべての相関係数は有意な0.2未満となっており、ほとんど相関がみられなかった。

## 2. 内的作業モデルを媒介変数に仮定した分析における結果

親の養育態度と自尊心の形成における関連について、内的作業モデルを媒介変数と仮定した媒介分析を行った。その結果を、図1、図2、図3に示す。

まず、親の養育態度としての「他者比較」は、自尊心に対して有意な負の影響を及ぼしていた( $\beta = -.18, p < .01$ )。そのため、続いて愛着スタイル尺度の2因子得点を媒介変数とする媒介分析を実施した。「他者比較」から「見捨てられ不安」( $\beta = .17, p < .01$ )および「親密性回避」( $\beta = .17, p < .01$ )への影響はいずれも有意であった。Step 1では「見捨てられ不安」が自尊心へ有意な負の影響を及ぼしていた( $\beta = -.57, p < .01$ )。次に、Step 2において「他者比較」を投入した結果、重決定係数の変化量は有意傾向にあり( $\Delta R^2 = .01, p < .10$ )、「見捨てられ不安」が与える影響も有意であった( $\beta = -.56, p < .01$ ) (図1)。

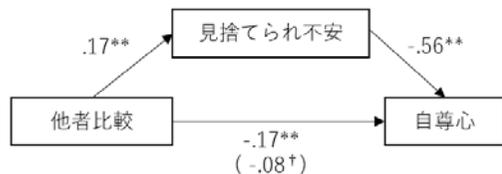


図1 他者比較と見捨てられ不安及び自尊感情の規定関係

同様に、「親密性回避」においても Step 1にて自尊心への有意な負の影響がみられた( $\beta = -.18, p < .01$ )。次に、Step 2におい

て「他者比較」を投入した結果、重決定係数の変化量は有意であり( $\Delta R^2 = .02, p < .01$ )、「親密性回避」が与える影響も有意であった( $\beta = -.16, p < .01$ ) (図2)。

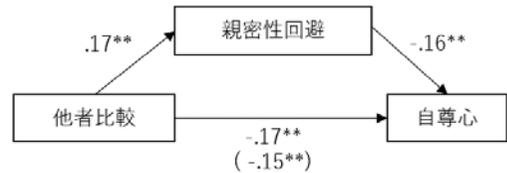


図2 他者比較と親密性の回避及び自尊感情の規定関係

続いて、親の養育態度としての「謙遜」は、自尊心に対して有意な負の影響を及ぼしていた( $\beta = -.10, p < .05$ )。そのため、続いて愛着スタイル尺度の2因子得点を媒介変数とする媒介分析を実施した。「謙遜」は「見捨てられ不安」へ有意な正の影響を及ぼしていた( $\beta = .17, p < .01$ )。一方、「親密性回避」については有意な影響は認められなかった。Step 1では「見捨てられ不安」が自尊心へ有意な負の影響を及ぼしていた( $\beta = -.57, p < .01$ )。次に、Step 2において「謙遜」を投入した結果、重決定係数の変化量は有意傾向にあり( $\Delta R^2 = .00, p < .10$ )、「見捨てられ不安」が与える影響も有意であった( $\beta = -.57, p < .01$ ) (図3)。

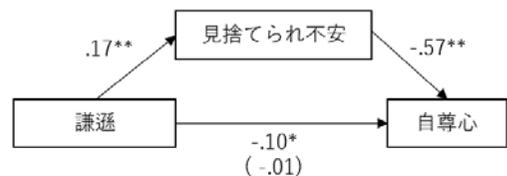


図3 謙遜と見捨てられ不安及び自尊感情の規定関係

なお、親の養育態度としての「曖昧表現」

は、自尊心に対して直接的に有意な影響を及ぼしておらず、また愛着スタイルの媒介効果については証明されなかった。

#### IV 考察

本研究の目的は、①親の養育態度が、②子どもの内的作業モデル形成に影響し、③自尊心の向上および低下に結びつく、という一連プロセスを検証するために、個人の内的作業モデルを媒介変数として仮定し、親の養育態度が青年期における個人の自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討することであった。

本研究では、自己卑下呈示や自己謙遜表出を多く用いる日本人の子どもは、親が自身のことを他者の前で否定的に表現するという経験を相対的に多く得ると考えられ、そのような親の「そと」に対する態度が、子供の自尊心の低下に結びつくことと仮定した。

##### 1. 分析結果

ピアソンの相関係数における分析結果から、他者と比較するような親の養育態度は子どもの愛着不安や親密回避と関連があることが示唆され、さらにそのような傾向が強まるほど、成人期における自尊心を下げる可能性が考えられた。謙遜的養育態度も同様に、子どもの愛着不安の増加や自尊心の低下と結びつくことが考えられた。さらに、親からの曖昧な表現は、比較と同様、子どもの愛着不安や親密回避と関連が認められたが、自尊心への向上及び低下への影響は証明されなかった。以上の前提が示されたうえで、本研究では親の養育態度と自尊心の形成における関連について、内的作業モデルを媒介変数とする媒介分析を行っ

た。その結果、他者と比較するような親の養育態度は、内的作業モデルとしての愛着スタイルにおける「見捨てられ不安」および「親密性回避」を高め、自尊心を低下させることが明らかとなった。また、親の謙遜的態度は、愛着スタイルにおける「見捨てられ不安」のみを高め、自尊心を低下させることが示された。なお、仮説に反し、親の曖昧表現は、自尊心の向上及び低下には影響しないことが明らかとなった。親の養育態度を否定的に認知しているほど、内的作業モデルとしての愛着スタイルにおける「見捨てられ不安」および「親密性の回避」が高く、「見捨てられ不安」および「親密性の回避」が高いことが自尊心の低下につながるというモデルが成立した。先行研究と同様に、親の養育態度と子どもの自尊感情における関係性において、内的作業モデルが媒介することが示された。

##### 2. 日本的親の養育態度と内的作業モデルおよび自尊感情の関連

子どもの頃に自身の行動を否定される経験が多く、受け入れられなかったと認識している場合、他者から自己を肯定してもらいたいと考えた際に、それを自己がなし得るのか不安を覚えるという。このことから、親が自身のことを「そと」のひとに対して否定的に表現するような養育態度を認知しているほど、見捨てられ不安が高まると考えられる。養育者が他者に対して「自己謙遜表出」や「自己卑下提示」を用いるのは、「そと」の他者と友好的関係を築こうとするからである。そのために、「うち」での評価と「そと」での評価が異なることが考えられる。状況によって自身の評価が

異なるというのは、子どもにとって一貫した自己評定をすることができなくなり、混乱が生じる。その結果として、「見捨てられ不安」や「親密性の回避」が高まったものと思われる。養育者はあくまでも、「そと」の他者との関係性を維持するために「自己謙遜表出」や「自己卑下提示」を用いているのであり、本心で否定的な評価を行っているわけではない。しかしながら、養育者が行うこれらの評価は、子どもにとって重要な他者である養育者から否定される経験であることに変わりはなく、結果として子どもの親の養育態度の認知がネガティブなものとなり、内的作業モデルや自尊感情にも影響を与えたことが示唆される。

日本の幼児教育において、子どものいざこざに対して、保育者は外側から事の推移を見守り、子どもたちの自主的な問題解決を促すことが多いことが文化比較研究から明らかにされている(Tobin, Hsueh, & Karasawa, 2009, 訳：風間, 平林ら, 2013)。このような保育者の態度は、子どもにとっては曖昧な養育態度とある可能性がある。風間, 平林ら(2013)は、親や保育者からの直接的な言葉による指示があいまいであったり、一時的に言語による指示を控えることにより、子どもにとって、親や保育者の意図が明確に伝わりにくいと考えられる態度をあいまいな養育態度であるとしている。曖昧な養育態度は、子どもに考えさせ、言われなくても行動できる子どもに育てほしいという発達期待があり、子どもの成長を促す目的に用いられる表現であると考えられる。そのため、子どもの自主性や自律性を尊重する親の養育態度と考えることもでき、そのような態度が子どもの自尊感

情の発達を促すと考えることができる。その一方で、早期から自立を促すような親の関わりは、よりプリミティブな段階においての愛着形成に伴う充足感を欠損されるリスクも十分に考えられ、この点は今後検討が必要である。

### 3. 本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究における限界を述べる。本研究では、親の用いる「自己卑下提示」や「自己謙遜表出」を認知しているかどうかのみに焦点を当て、内的作業モデルおよび自尊感情への影響を検討した。篠原・福山(1987)は、親の養育態度の影響を受ける子ども自身が親の養育態度をどのように感じ、どのように対処するかに意味があるため、子ども自身の認知が重要であると述べている。養育者の用いる自己卑下提示や自己謙遜表出を、子どもがそれと理解しているかどうかによっても、親の養育態度のとらえ方、および内的作業モデルや自尊感情への影響が異なると考えられ、今後より吟味していく必要がある。

### 謝辞

本研究を作成するにあたって、貴重なご指導ご鞭撻を頂きました臨床心理学科の前場康介先生に心より御礼申し上げます。並びに、質問調査にご協力頂いた女子大学生の皆様へ深く感謝いたします。

### 文献

- 東 洋(1994). 日本人のしつけと教育— 発達の日米比較にもとづいて— 東京大学出版会.
- 遠藤由美(1995). 精神的健康の指標として

- の自己をめぐる議論 社会心理学研究, 11, 134-144.
- 船越理沙・潮村公弘(2013). 関係流動性ならびに文化的自己観と集団表象の関連が内集団他者に対する自己謙遜表出に及ぼす影響：日本のコミュニケーション・スキルの媒介効果 多文化関係学, 10, 103-105.
- HR Markus, S Kitayama (1991). Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation Psychological review 98, 224-253.
- 井上清子(2015). 両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について 生活科学研究, 37, 97-105.
- 岩瀬ひと美・根津克己(2016). 関係に特有な内的作業モデルの形成要因についての検討 東京成徳大学臨床心理学研究, 16, 86-95.
- 泉 玲・石田 弓(2012). 特定の他者ごとに特有な内的作業モデルを想定した愛着スタイルと対人不安の関連の検討 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 11, 55-70.
- 風間みどり・平林秀美・唐澤真弓(2013). 日本の母親のあいまいな養育態度と4歳の子どもの他者理解：日米比較からの検討 発達心理学研究, 24(2), 126-138.
- 数井みゆき・遠藤利彦(編)アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 pp. 32-48.
- 黒田実郎・大羽 泰・岡田洋子訳(1976). 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動 岩崎学術出版社.
- 黒田実郎・大羽 泰・岡田洋子訳(1977). 母子関係の理論Ⅱ：分離不安 岩崎学術出版社.
- 黒田実郎・大羽 泰・岡田洋子訳(1981). 母子関係の理論Ⅲ：愛着喪失 岩崎学術出版社.
- 無藤 隆・森 敏明・遠藤由美・玉瀬耕治(2004). 心理学 新版(New Liberal Arts Selection)有斐閣.
- 中尾達馬・加藤和生(2004). 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み 心理学研究, 75(2), 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生(2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 野村早也佳・福井義一(2008). 親からの否定的な言葉が自尊感情や愛着型, 社会的スキルに及ぼす影響 日本心理学会大会発表論文集.
- 坂上裕子(2005). アタッチメントの発達を支える内的作業モデル
- 島 義弘(2010). 愛着の内的作業モデルが対人情報処理に及ぼす影響—語彙判断課題による検討 パーソナリティ研究, 18(2), 75-84.
- 島 義弘(2014). 親の養育態度の認知は社会適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果 発達心理学研究, 25, 260-267.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.